奈良県・韓国ゆかりの地紹介

第四弾　　飛鳥資料館

今年は、奈良県と韓国忠清南道が 2011 年に友好提携を締結して 10 周年を迎える記念の年です。これを記念して、奈良県内にある奈良と韓国とのゆかりの地、特に忠清南道とのゆかりを中心にご紹介しています。第四弾となる今回は、飛鳥資料館をご紹介します！

飛鳥は、今から 1400 年前、約 100 年にわたって都が置かれ、日本の国家や文化の基礎が作り上げられた場所であり、大陸からの新しい文化や技術をもとに、「日本ではじめて」のものがたくさん生まれた場所であると言われています。

奈良県明日香村にある「飛鳥資料館」では、飛鳥の歴史と文化を紹介しており、現在の明日香村に残る「飛鳥」の姿を見ることが出来ます。

飛鳥資料館の方へのインタビュー

Q1. 飛鳥資料館では年に何回か特別展を開催されているとのことですが、主にどういったテーマの展示をされていますか。

A1. 年に 1～2 回、春秋に特別展をします。高松塚古墳や飛鳥の石造物などの定番のテーマに加え、飛鳥の古写真や古地図など、様々な切り口から飛鳥を紹介してきました。

飛鳥資料館展示室の様子

Q2. 2018 年から「よみがえる飛鳥の工房－日韓の技術交流を探るー」という特別展を開催されていますが、この特別展を企画した理由を教えてください。

また、展示物や文献等の中で、特に日韓交流の証や昔からの関係性等がよく分かる物はありますか。

A2. 飛鳥池工房遺跡の調査成果をご覧いただける展示を企画しました。出土品を展示するだけではなく、奈良文化財研究所と韓国国立文化財研究所の共同研究の成果などをもとに、日韓の文化交流や技術交流の実態を紹介することで、より広い視野から飛鳥の歴史を紹介しました。

日韓の交流を示す例の一つに、ガラスの製作技術が挙げられます。飛鳥池工房遺跡からはガラスの材料を溶かすための「坩堝（るつぼ）」が出土しています。この坩堝の形は、実は韓国・百済の王宮里（ワングンリ）遺跡や弥勒寺（ミルクサ）跡のガラス工房から出土した坩堝ととても良く似ています。百済と飛鳥のつながりを感じさせる資料です。

飛鳥資料館では、飛鳥時代の都を再現した模型や遺跡からの出土品等が展示されているだけでなく、実際に楽しみながら飛鳥について理解を深めることができる体験イベント等も開催されていますのでぜひ参加してみてください。

（奈良県国際交流員　南　炫汀）